

# Expression of Glucagon-Like Peptide 1 Receptor and its Effects on Biologic Behavior in Pancreatic Neuroendocrine Tumors

カセス, アナ イネス

<https://hdl.handle.net/2324/1500554>

---

出版情報 : Kyushu University, 2014, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	カセス アナ イネス
論文名	Expression of Glucagon-Like Peptide 1 Receptor and its Effects on Biologic Behavior in Pancreatic Neuroendocrine Tumors
論文調査委員	主査 九州大学 教授 前原 喜彦 副査 九州大学 教授 伊藤 隆司 副査 九州大学 教授 岩本 幸英

### 論文審査の結果の要旨

Glucagon-like peptide 1 (GLP-1)はその受容体であるGLP-1レセプターと結合し、膵β細胞の細胞増殖を促進し、アポトーシスを抑制する。

本研究では、膵神経内分泌腫瘍(PNETs)denoGLP-1受容体発現の意義について検討した。PNETs切除症例50例で免疫組織化学染色にてGLP-1受容体の発現を検討し、臨床病理学的因子と比較検討した。

結果として、PNETs切除症例50例中、GLP-1受容体は23例が陽性、27例が陰性であった。GLP-1受容体陽性症例は、ガストリノーマや非機能性腫瘍に比べ、インスリノーマの頻度が有意に高かった( $p < 0.05$ )。GLP-1受容体発現とPNETs切除後の予後については、相関を認めなかったが( $p = 0.82$ )、リンパ節や肝転移などの遠隔転移巣の多くが、GLP-1受容体陽性であった(8/11, 73%)。

ゆえに、GLP-1受容体はインスリノーマの診断に有効であり、PNETsの遠隔転移の治療標的やインスリン過剰産生の制御の標的になる可能性がある。

以上の成績は、この方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容、及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格と決定した